

おい図書館

No.36

浦安図書館を

訪ねて

私は、時間がとけると、よく古本屋に出掛けます。欲しい本があるから出掛けるのに、入った店におもしろそうなものを見付けると立ち止まって手にとり、時には時間が経つのも忘れて引き込まれるようにして立ち読みしています。そして買うべき本を忘れて、全く別のジャンルのものを買い込んできたりします。ところが不思議なことに或る時、その本が大変重要な役目を果た

してくれるのです。他人には全く価値のないものでも、私にとつては名著である本があります。逆もありません。本とのつきあいは、小さい頃から老齢になつた今まで切れることなく長続きしました。本との縁は、人生の縁と同じような気がします。早くから出会っていても縁のないもの、遅く出会っても深い関係ができるもの、自分の傍らに置いておかねばならないもの、図書館に出掛けていつて借りて読むもの、さまざまです。自分で持つ本の数には制限がありますから、今評判になつてゐる小説を読んどみようとかが、調べ物をしたり、ちよつとした原稿を書く時等、図書館にひとつ走りして一気に読んど帰つて来る場合、あざつと目を通して済む場合、あ

るいはコピーを取つて帰つて、資料として使う場合がよくあります。そんな時に気安く出入りできる図書館が何よりなのです。



先日、ひよんなことから青木さんに誘われて浦安図書館を見学するチャンスに恵まれました。広々とした土地に悠々と建つてゐる、外観のたたずまいは勿論のこと、中に入つてワンフロアに大量の本が、全く少量にしか見えないほどゆつたりしたスペースにおさまっていました。私が、しよつちゅう出掛ける松戸図書館は、所狭しとばかりに

本、本、本の行列と、運び取るにしても他人と擦れ違ふのに「ごめんなさい」と声をかけあうほどです。ゆつくり探す事も気がひけるほどです。また、リタイアした男の方々が一日ゆつくり本に親しむための座り心地好い椅子もありません。老人介護の問題は勿論大切ですが。けれどもまだまだ元気な高齢者の心の糧を得る場、心の癒しがなされる場になる図書館の大切さを思ひます。人生の大半を生きたための仕事に時間を取られてきた人達が、やっと

自分と向き合う時間に恵まれて、死を覚悟しながら未来を考へる時なのです。



浦安図書館には、お母さんと一緒に豊かな感性を育む場としての、子どもたちの広場も明るく備えられていました。けれども、他の町の図書館を羨ましがってばかりはいられません。私たちの町の今ある図書館を、もつと使いやすく、もつと親しみやすく、もつと身近かなものにするために、市民がとぎることには何かを考へる者にならなければと思ひました。そこで「おい、図書館」の運動をすすめている方々の姿が見えていなかったので自分を反省した次第です。二十一世紀に向かつて、松戸市をどのような町にするかを、一人一人が真剣に考へる時が目の前に来ています。保守的で抽象的な政策案よりも、思い切つた発想の転換が必要な時代に入つて

いることを思ひます。まさに今、地方分権が叫ばれているのだから、あれもこれもではなく、周囲の町々とのネットワークをこころみながら、わが町のキラッと光るものを作り出すときではないでしょうか。

そんな時、スポットライトを可図書館に当ててみたいと切に思ひます。老人も子どもも、働き盛りの男も女も、青年たちも忙しさにイライラせず、自分を愛するように隣人をも愛する者になれる場は図書館にありと言へるような町作りを夢見る私です。

(安増 幸子)

発行 おーい図書館
連絡先 青木和子

松戸市総合 八三〇、六〇

〇四七(三六七)五三八四